第３章

純粋な献愛奉仕
心のなかに起こる変化

第１節

श्रीशुक उवाच
एवमेतन्निगदितं पृष्टवान् यद्भवान् मम ।
नृणां यन्म्रियमाणानां मनुष्येषु मनीषिणाम् ॥ १ ॥

śrī-śuka uvāca
evam etan nigaditaṁ
pṛṣṭavān yad bhavān mama
nṛṇāṁ yan mriyamāṇānāṁ
manuṣyeṣu manīṣiṇām

śrī-śukaḥ uvāca—シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが言った; *evam*—そのように; *etat*—これらすべて; *nigaditam*—答えた; *pṛṣṭavān*—あなたが尋ねたから; *yat*—〜であるもの; *bhavān*—優れたあなた; *mama*—私に; *nṛṇām*—人間の; *yat*—〜である者; *mriyamāṇānām*—死への入り口に; *manuṣyeṣu*—人間のなかで; *manīṣiṇām*—知性ある者達の。

シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが言った。「マハーラージャ・パリークシットよ。あなたは、死の世界の入り口に立つ知性ある者たちにどのような義務があるのか尋ね、そして私はその問いに答えてきた」

要旨解説

全世界に何億何千万もの男性女性が住んでいますが、そのほとんどが知性に欠けています。精神魂についてほとんど知らないからです。自分たちが持っている濃密・希薄な体と自分を同一視しているため（もちろんそれは事実ではなく）、命についてまちがった観念しかない人たちばかりです。人間社会で高い・低いと評価づけされているさまざまな地位にいても、体と心を超越した自分について自問しなければ、社会でなにをしようと完全な失敗であることをよく理解しなくてはなりません。ですから、無数の人々のなかでたった一人が精神的な自分について自問し、やがて『ヴェーダンタ・スートラ』、『バガヴァッ

ド・ギーター』、『シュリーマド・バーガヴァタム』といった啓示経典に答を求めるようになるのです。しかし経典を読んだり聞いたりしても、悟った精神指導者との導きがなければ、自己に関するほんとうの質を確かに悟ることはできません。そして、何千何百万もの人々のなかでも、ほんのわずかな人たちだけが主クリシュナをほんとうに知ることができます。『チャイタンニャ・チャリタームリタ』（マデャ第20章・第122-123節）では、「主クリシュナはいわれのない哀れみの心から、クリシュナとの純粋な絆をほとんど忘れてしまった賢い人々が読めるように、ヴャーサデーヴァという化身の姿でヴェーダ経典を示した」と言われています。そのような賢い人々でさえ、主と自分たちとの関係を忘れているのです。だからこそバクティ・ヨーガの方法全体が、その失われた関係を復活させるためにあります。この復活は、840万種類の生物進化の最後にある人間生活でこそ実現されるものです。人間のなかでもほんとうに知性をそなえた人々は、この機会を真剣に受けとめなくてはなりません。人間ならだれでも知性があるというわけではありませんから、人間社会の重要性がだれにでも理解されるわけではないのです。この節ではとくに *manīṣiṇām*（マニーシナーンム）「思慮深い」という言葉が使われています。ですからマハーラージャ・パリークシットのようなマニーシナーンムの人物は、主クリシュナの蓮華の御足に心から身をゆだね、ハリ・カタームリタ、すなわち主の聖なる名前について聞いたり唱えたりする献愛奉仕に没頭しなくてはなりません。その行為が、死ぬ準備をしている人に特別に勧められています。